

[野菜部門]

7. 多収でえり部のしまりが良い高冷地夏秋どり白ネギ品種「白矢」

[要約]

白ネギ品種「白矢（渡辺採種場、系統番号 W910）」は、高冷地における8月～11月どりの収量が標準品種と同程度に多く、11月になっても2L収量が多く収穫適期が長い。また、葉鞘上部（以下、えり部）のしまりが良く効率的に調整作業を行うことができる。

[担当] 高冷地研究室

[連絡先] 電話 0867-66-2043

[分類] 技術

[背景・ねらい]

高冷地における白ネギ品種は、8月どりでは高温による生育停滞を起こしにくいこと、11月どりでは過度な肥大や老化がなく出荷に適した状態を保てることが求められる。これらに適し、病害の耐性があり、コンプレッサーによる葉むき調整作業の効率に関係するえり部のしまりが良い品種を選定する。

[成果の内容・特徴]

1. 8月収穫での「白矢」の出荷箱数は、冷涼（平成21年）あるいは高温（平成22年）の夏の年ともに、標準品種の「夏扇4号」、「ホワイトスター」と同程度である（図1）。
2. 10月、11月収穫では、「白矢」の総箱数は標準品種の「夏扇4号」と同程度である（図1）。11月収穫までに「夏扇4号」は肥大が進み、収益率が低い3L箱数が多い傾向にある。これに対し「白矢」は肥大が遅く、収益率が高い2Lの箱数が10月と同程度であり、収穫適期が長い。
3. コンプレッサーで調整したときにえり部に裂けが見られた個体は、「夏扇4号」、「ホワイトスター」では40%程度であったのに対し、「白矢」は10%程度で、えり部のしまりが良い（表1）。このため、葉が余計にむけることをあまり気にせずに調整できるので、効率的に作業を行うことができる。
4. 「白矢」の軟腐病への耐性は、「ホワイトスター」に比べて強く、「夏扇4号」と同程度と見られる（表2）。さび病については、11月どり作型で「夏扇4号」と比べて多い傾向があるが、適切に防除をすれば大きな問題にはならない。

[成果の活用面・留意点]

1. 本結果は、標高約400m以上の高冷地における夏秋どり栽培試験で得られた。
2. 秋冷でさび病が発生しやすい傾向にあるので、主に窒素肥料が欠乏しないように管理するとともに、発生を見ながら防除を行う。

[具体的データ]

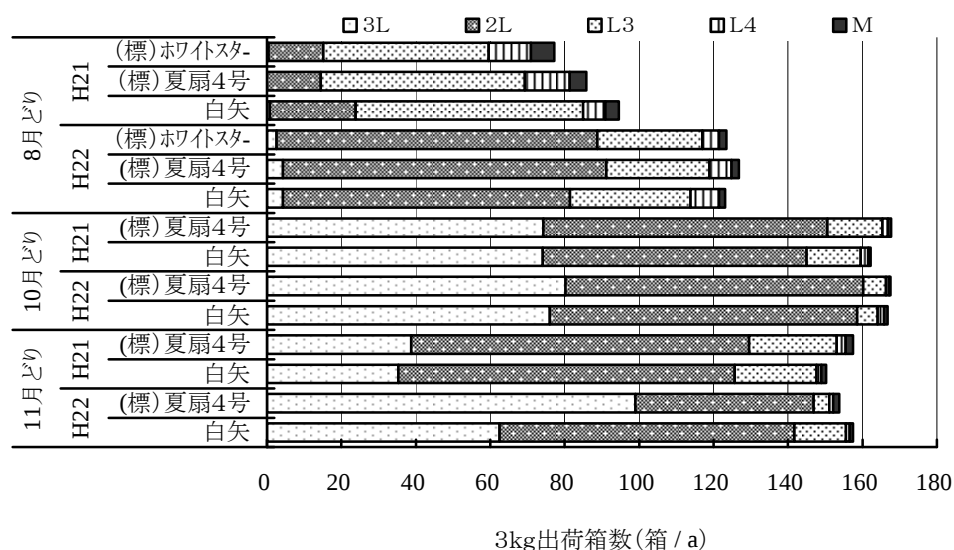


図1 各作型での規格別箱数の品種比較

注) 3L : 220 g 以上(16 本/箱)、2L : 150 g 以上 220 g 未満(20 本/箱)、L3 : 120 g 以上 150 g 未満(30 本/箱)
 L4 : 100 g 以上 120 g 未満 (40 本/箱)、M : 80 g 以上 100 g 未満 (50 本/箱)
 は種日 : 8月どり ; 2月8日(H22)及び9日(H21)、10及び11月どり ; 3月23日(H22)及び4月3日(H21)

表1 調整後のえり部の裂け葉^z発生^yの品種比較

	裂け葉発生 個体率 ^y (%)	裂け葉率 ^x (%)
(標) ホワイトスター	40	12
(標) 夏扇4号	36	11
白矢	13	4

^z 抽出中の葉を除いて、葉を4枚残すようにコンプレッサー調整機で調整した後に、裂けが認められた葉。

^y 裂け葉発生個体率＝裂け葉が発生した個体数／調査個体数×100 (%)

^x 裂け葉率＝裂け葉数／(調査個体数×4)×100

表2 軟腐病及びさび病^z発生率^yの品種比較

	軟腐病 ^y (%)	さび病 ^x (%)
(標) ホワイトスター	7.5	—
(標) 夏扇4号	4.3	20
白矢	2.2	53

^z 病害発生率＝病害発生個体／調査個体×100 (%)

^y 平成21年8月調査。約250個体を2反復調査した平均。

^x 平成22年11月調査。55個体を2反復調査した平均。

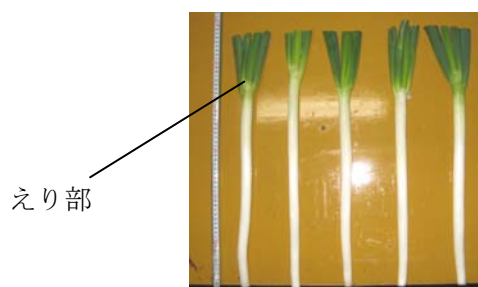


図2 調整後の「白矢」(11月収穫)

[その他]

研究課題名 : 白ネギの良品安定生産技術の確立

予算区分 : 県単

研究期間 : 2009～2010 年度 (真庭農業普及指導センター実証班での検討を含む)

研究担当者 : 佐野大樹、荒木有朋